

傳藤原佐理以肋切二

301-10



1200501367213

301
10



始



ゆゑのうらたにふるははらけわうら
まの 何れかたもまにわともし

是不知

後人ふら

おもしろにきくおれもいおはるる
ちかちか ちかちか ゆさ者ありし

ゆゑの樹を不わらわら

是は法

をばさるは花をたえは志はちの

ゆゑのうらたにふるははらけわうら

是不知

後人ふら

ゆゑのうらたにふるははらけわうら

ゆゑのうらたにふるははらけわうら

あはれおのこころは此言前を

きくおのこころ

二条のよき文の書きのうらたを
しつとまらしむるは四月に
はあしやしとちかちかありた

さしいふしむれらゆめり
なかりうわらうまよりのけり

又室康秀

あつきののほろけりわにあらうる花に
あつきのゆきとちりしわらう

雪のふりうらるる

雪のふりうらるる
雪のふりうらるる
雪のふりうらるる
雪のふりうらるる

春のあつめに 花原さき

あつわさきはなわ花原さき
あつわさきはなわ花原さき

春のあつめに 花原さき

あつわさきはなわ花原さき
あつわさきはなわ花原さき

寛平御時后字のそ名

源當純

き、さあわたくしは、はるばるの
にあらたまれど、お礼もあやう
ら、さあ、お礼もあやう
におや、う、お礼もあやう

このの、お礼もあやう
お礼もあやう、お礼もあやう

お礼もあやう

お礼もあやう、お礼もあやう

お礼もあやう、お礼もあやう

お礼もあやう

お礼もあやう

お礼もあやう、お礼もあやう

お礼もあやう

お礼もあやう

お礼もあやう、お礼もあやう

長谷寺まうしきしに
人まふしせしや
程始て露かきま
になむやはあま
ひ したれまふ
めま、たき

母

人ままあし
花のしりのま

水ぬきし梅花の用を侍る

伊勢

はろ、もになり
花の鏡を成る水

ふやうしんくゝ云々

家ノ竹わさるゝ梅の花わさるゝ

くらぬ

せう

くらぬとあつとせうしぬわさるゝ
んがの花いふいとまにうらみえ

寛平御時ノ后宮れ言ふ

後ノ

わあつし神くうしし車と舟は

春はさうとあつみかな

ま性法師

ちるゝとあつしあつしもの

うましし二つびのり

い

後ノ

くらぬとあつしあつしもの

いふはつたのけしひきききき

人の家よりゆきかき様の開始

かきかきかきかき

かき

いふはつたのけしひききき
かきかきかきかき
かきかきかきかき

かき

かき

かきかきかきかき
かきかきかきかき
かきかきかきかき

かきかきかきかき
かきかきかきかき
かきかきかきかき

かきかきかきかき

かきかきかきかき
かきかきかきかき
かきかきかきかき

かきかきかきかき

かきかきかき

かき

年経る能も老いばあれを
ふれ老物并ふとや

たうささの院よりけくの花

をみる

杉原葉年

色中絶天様れやうあまは書
をぬるるま

山橋を

東照法師

うらのこやんくく山
とをわくくふはくくせ

題不

はしうたまなまのいぬ人ら
たふをわくくくせまぬ人ら

花の風 京を見やわ

東照法師

美和少将 名やまのしりくもあつし
よまの 都 史者 此の きるあけら

きくさ乃花 此言をいへるの
おきやう事をいへ

弘友別

いふも 花や 世にまをくらあ

車 市より心なるをあらたまのなる

を新流おんらあ

弘母

いれし系もとあけをいへる者ら
いんたぬ。くしんやまの橋ま

よあた下まらねと花柳 時徒
下まらねと花柳

おくらをいせよとらうなありえ
現のまゝいふえよわえゆるら言

寛平御后宮のそあはせに

孔友別

みよしれよのまおくら花
ゆうらるえりあわられらる

三月四月はあはら時續う

伊勢

せくらばる老流くらばらと
のまら人此くららわらわ

おくらのはるわさあこえこし

うら車はせららる人のたはら

よららら

あはららとならららららら

とまればさふ人毛まらふ

ふ

業平朝

今もあま明の雪のまふな
まー記のふかやと花とみまーや

題ふ

同人

ふかぬれ者ふゆと志おなま物

今日こやせふはあわて

あまふらばあまふらふ

をこまふらふらふらふらふ

記有友
まのふ

あまふらふらふらふらふらふ
むらふらふらふらふらふらふ
まのふらふらふらふらふらふ

都 ころ

物 恒

わくまのきりみりころころ流人老ら
おたませれらりいあーるるる

亭子院奇合

伊 勢

うらまをいしなまの奥ふんせくを
かのもある後年用務

終

